

実践的な生徒指導の在り方に関する一考察

A Study of Practical Guidance for Students

松山 友之

MATSUYAMA Tomoyuki

学力向上を進めるために、多くの学校で学習規律を定着させ、落ち着いた雰囲気の中で授業を行う指導が重視されている。子どもたちが、授業で素直に教師の話聞き、指示されたように学習活動に取り組むことは多くの教師の願いであろう。ところが、立ち歩きなど落ち着かない子どもが増えている現状や保護者との難しい対応等、実際の学級経営は厳しいものがある。この状況を解決し、望ましい学習指導ができる学級をつくるにはどのようにしたらよいのだろうか。

平成28年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査からは、児童生徒の規範意識など概ね良好であることが分かる。学習指導と生徒指導は裏表一体の関係にあると言っても過言ではない。学力向上に向けて、実践的な生徒指導の在り方を考えるときその基本にあるのは、子どもの立場に立って考えることであり、生徒指導の三機能を生かして、子どもたちが納得する指導を積み重ねることが大切であると考えられる。

キーワード 生徒指導の三機能 自己指導能力 学級づくり 人間関係づくり

1. 生徒指導とは何か

生徒指導提要では、「生徒指導とは、一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」とその意義を定義している。そして、自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図るとしている。この自己指導能力は生徒指導によってはぐくまれる重要な資質・能力であると考えられる。1)

本論では、実践的な生徒指導の在り方について研究を進めるため、特に教師が子どもと関わる場面について考えることにする。その最も重要な場面は学習指導である。次に学習指導と生徒指導について考えてみたい。

(1) 学習指導における生徒指導とは

生徒指導提要では、学習指導における生徒指導には二つの側面があるとしている。それは、基

本的な学習の在り方等について指導を行うなど「一人一人の児童生徒の学習場面への適応をいかに図るかといった生徒指導」であり、もう一つは、ねらいの達成に向けて意欲的に学習に取り組めるよう、一人一人を生かした創意工夫のある指導を行うといった「一人一人の児童生徒の意欲的な学習を促し、本来の各教科等のねらいの達成や進路の保障につながる生徒指導」である。2)

今までは前者の生徒指導に意識が向きがちであったことを指摘し、後者の視点に立った、一人一人の児童生徒にとって「わかる授業」の成立や、一人一人の児童生徒を生かした意欲的な学習の成立に向けた創意工夫のある学習指導が一層必要であるとして、その指導に際して次の3つの視点を挙げている。これは生徒指導の三機能と呼ばれるものである。これらはまさに積極的な生徒指導であり、児童生徒の自己肯定感やコミュニケーション能力の成立、よりよい人間関係の構築などにつながるものである。3)

生徒指導の三機能

- ①児童生徒に自己存在感を与えること
- ②共感的な人間関係を育成すること
- ③自己決定の場を与え自己の可能性の開発を援助すること

このように生徒指導を3つの機能から考えると学校行われる生徒指導が各教科等の指導上の工夫だけにとどまらず、学校の教育活動全体で指導するものであることがよく分かる。また、生徒指導の機能を生かした授業づくりの重要性についても認識させられる。では、生徒指導の対象となる児童生徒の実態はどのようになっているのだろうか。全国学力学習状況調査のデータをもとに考察してみたい。

2. 子どもたちの実態はどのようになっているか

子どもたちの学習指導における生徒指導の実態を知るデータとして、「全国学力学習状況調査（平成28年9月）の質問紙の結果の分析 ⑤ユニバーサルデザイン、規範意識、道徳の時間の分析」が有効かつ最新のデータであると考えられる。次にこのデータから学習指導に結びつく内容を分析し、子どもの実態を明らかにするとともに学力向上に関連する子どもの実態についても分析を試みたい。（以下に示すグラフ等については、平成28年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査から引用した。）

(1) 子どものデータから見える生徒指導の実態

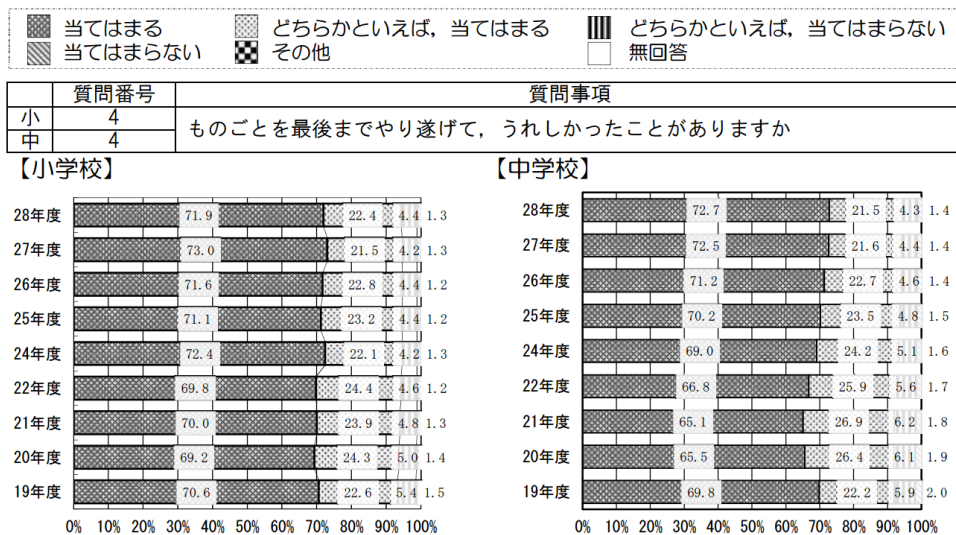
児童生徒質問紙と学力のクロス分析からは、次のように回答している児童生徒の方が、教科の平均正答率が高い傾向が見られた。4)

【小学校】【中学校】 () は質問番号

- ・ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある(4)
- ・学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある(31)
- ・地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある(35)
- ・学校のきまり[規則]を守っている(39)
- ・人の役に立つ人間になりたいと思う(43)

この結果からも自己肯定感や学級での所属意識、規範意識、自己有用感といった生徒指導に関連する項目が高いほど、正答率が高いことが分かる。正答率が高いほど学力が高いと簡単には言えないかもしれないが、この5つの質問すべてを満たす学級が児童生徒をイメージするとそこには落ち着いて授業に取り組み、前向きに協力し合って学習活動に取り組んでいる学級の姿が浮かんでくるのではないだろうか。また、極めて当たり前のことかもしれないが、先に述べた生徒指導の三機能が活かされているほど、学力が高いということも見て取れる。端的に言って、授業の中で、児童生徒が主体的に考えを述べ、対話し、考える授業をしている学校は学力も高く、生徒指導上の問題も少ないということである。

次に経年比較のデータも含めて、5つの質問を分析すると子どもたちの意識や教師や学校が特に力を入れて取り組んでいることが見えてくる。「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがありますか」という児童生徒質問紙に対して、平成19年度からの7度の調査で小学校では、「当てはまる」が非常に高く、ほとんどが70%近くである。中学校では上昇傾向にあり、平成28年度は最も高72.7%となっている。この学年の小学校6年次の調査は71.1%であり1.6%も増えている。5)

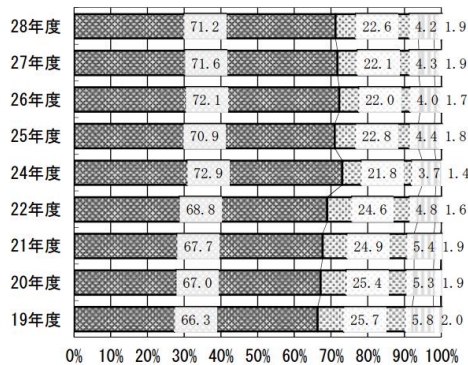


このことは子どもにとって最後までやり遂げるという達成感がいかに大切であるかを物語るとともに、学校現場において、教師が学習活動の中でのものごとを最後までやり遂げる活動が重要であると考え、そのような達成感を得られる場面を意図的につくっているということである。児童生徒一人一人が自己肯定感を高めることにつながることを教師が考え指導していることを示している。

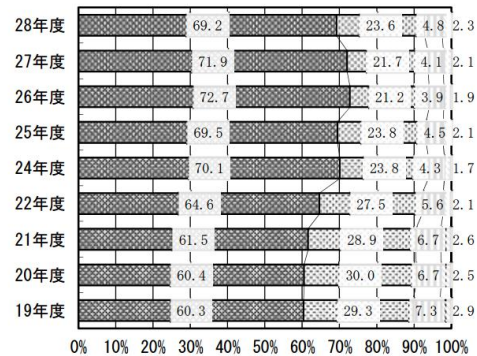
続けて、特徴的なのは「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」という問いである。この問いに対しても「当てはまる」と答えている児童はやはり70%以上おり、中学校でも上昇傾向にある。授業が成立し、落ち着いている学級では、人の役に立ちたいという肯定的なものの考え方がもつことができるし、また、大人が思う以上に子どもは社会の一員として、人の役に立ちたい、よい人間になりたいという思いをもって生きているということである。6)

| | 質問番号 | 質問事項 |
|---|------|---------------------|
| 小 | 43 | 人の役に立つ人間になりたいと思いますか |
| 中 | 43 | |

【小学校】



【中学校】

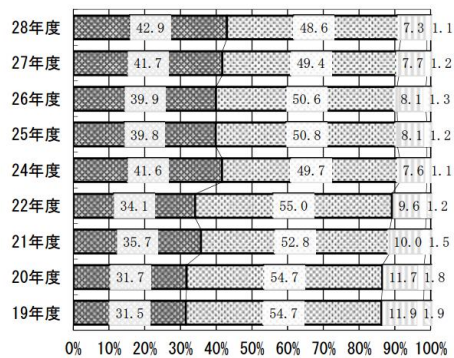


(2) 規範意識に見える子どもの実態

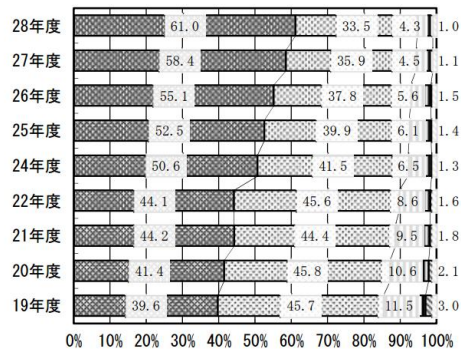
学力向上の基本的な学習習慣として、学習規律の重要性が語られて久しい。この点についても経年比較を行うことで、このクロス集計は多くのことを教えてくれる。質問紙の番号は前後するが、学校のきまりから規範意識について考えてみたい。7)

| | 質問番号 | 質問事項 |
|---|------|----------------------|
| 小 | 39 | 学校のきまり [規則] を守っていますか |
| 中 | 39 | |

【小学校】



【中学校】



「学校のきまり [規則] を守っていますか」の問いに対して、「当てはまる」と答えている小学生と中学生の割合は、強い上昇傾向にあり小学生では平成28年度で42.9%（平成19年度が31.5%で11.4%増）、中学校にいたっては61.0%（平成19年度が39.6%で21.4%増）である。平成28年度の中学3年生が小学校6年生であった平成25年度と比較しても39.8%であったことから21.2%増加している。このように学力向上の取り組みの中で、学校のきまりが重視され、児童生徒が素直に受け入れてきまりを守っている実態が浮かび上がってくる。また、「どちらかと言えば、守っている」と答えている児童生徒を含めると平成28年度は小学校で91.5%、中学校で94.5%に達している。

このことは学校現場において多様に問題が起こっているが、児童生徒のほとんどはきまりを守り、社会人として着実によい方向に進んでいることを示している。もっと突っ込んだ言い方をす

れば、これに当てはまらない子どもたち、小学校で8.5%、中学校では5.5%の子どもたちが問題を抱え、逸脱した行動をとっているとも言える。

このようにして分析してみると児童生徒は非常によい方向に進んでいることが分かる。しかしこのデータを教師の側から見た学校質問紙と比較すると違った見方もできる。それは、学校質問紙の回答も概ね同じ内容の評価が高いのだが、教師や学校の評価は子どもほど高くはないのである。このことは教師や学校の見方は厳しく、もっと改善の余地がある感じているということである。ところが子どもたちはほぼ満足し、問題があるとは考えていないのである。

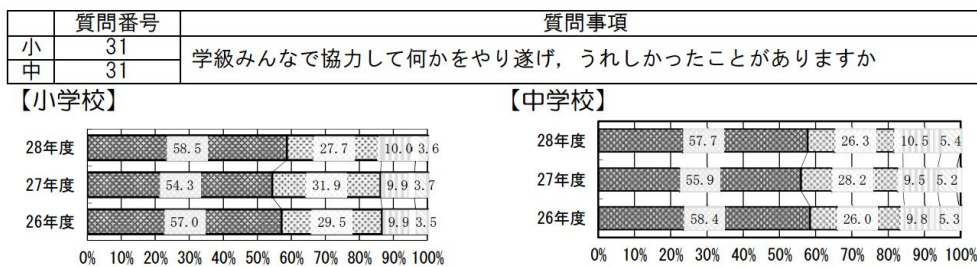
私はこの結果から、学習規律に問題があることを子どもたちに意識させるには教師の工夫が必要であると考えます。つまり教師の問題意識を子どもの問題意識に広げる作業が必要だということである。教師が口で、「学習規律ができていない」と言っても子どもには何ができていないか分からないということである。

(3) 子どもの実態から見える学級づくりの視点

全国学力学習状況調査の質問紙のまとめには、平成28年度調査から次期指導要領の関連で、新しい項目が増えている。特に授業に関連する点について、生徒指導との関連が深いと考えられる点について考察してみる。

次期指導要領のキーワードとして「アクティブ・ラーニング」が挙げられている。これから多くの学校は、このアクティブ・ラーニングの名のもとに授業改善委取り組むことになる。文部科学省はこのアクティブ・ラーニングを『主体的・対話的で深い学び』としているので、学力向上に向けての授業でも、アクティブ・ラーニングの視点をもって授業を進めることが求められるであろう。

このアクティブ・ラーニングを進めるとき必要になるのが、仲間と協力して学習に取り組む協働的な学びである。質問紙でも挙げられていた「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」がこれにあたる。8)



この質問は平成26年から設けられたものだが、「当てはまる」が60%近くあり、「やや当てはまる」を加えると小学校でも中学校でも85%近くになる。学級みんなでやり遂げることがいかに大きな力をもっているかをこのデータは示している。このことは学力向上には、よりよい学級づくりが重要であることを示すとともに、人間関係づくりの大切さも示している。

初めに、多くの児童生徒は規範意識も高く、まじめに授業を受けていることを述べてきた。残り10%の児童生徒をどうするか。今までの授業の枠組みや進め方の中で解決することは非常に難

しいことは明らかである。そのためにも、生徒指導の三機能を生かした授業改善やユニバーサルデザインの視点をもつことなど、単純な学習習慣の押し付けではなく、学習がいかにかに子どもにとって意味のあるものであるかを考える必要がある。

子どもたちにとって認められ励まし合える温かな学級の雰囲気づくりがいかにかに大切であるかが分かる。学級づくりの視点からも、学習指導における実践的な生徒指導の在り方について考えてみたい。

3. 学習指導における実践的な生徒指導の在り方について

学習指導と生徒指導は表裏一体の関係にあることは以前にも述べたとおりである。そこで、「学力向上の基盤としての生徒指導」、「教師の意識を高める生徒指導」、「学級づくりにおける実践的な生徒指導」の3つの視点から実践的な生徒指導の在り方についてその方向性を明らかにしてみたい。

(1) 学力向上の基盤として生徒指導

学力向上の基盤としての生徒指導を考えると、多くの教師は「人の話を静かに聞く」など学習習慣の定着を考えるのではないだろうか。これは教師が授業をしやすい環境をつくることで学力向上を図る考え方である。学習習慣として定着させることは大切だが、ここで止まっているは本当の意味での学力向上の基盤とはならないと考える。

有村は次のように述べている。「ここに示す〈機能〉とは、各教科の指導において生徒指導の理念やあり方が関与し、子どもの自発的な学習活動を有効たらしめることである。換言すれば、子どもの潜在的な学びの能力を十分に引き出すことを可能にすることが生徒指導といえよう。」この考え方の中にあるように、教師が授業しやすい環境をつくるという消極的な意味だけでなく、子どもたちの自発的な学習活動を導き出すものでなければならないのである。

このような子どもの自発的な学習活動を機能としての生徒指導から考えるとき、子どもの学習活動に機能する「自己指導能力」の育成を目指すことが重要であり、有村は、その方法原理として次の3点を挙げている。

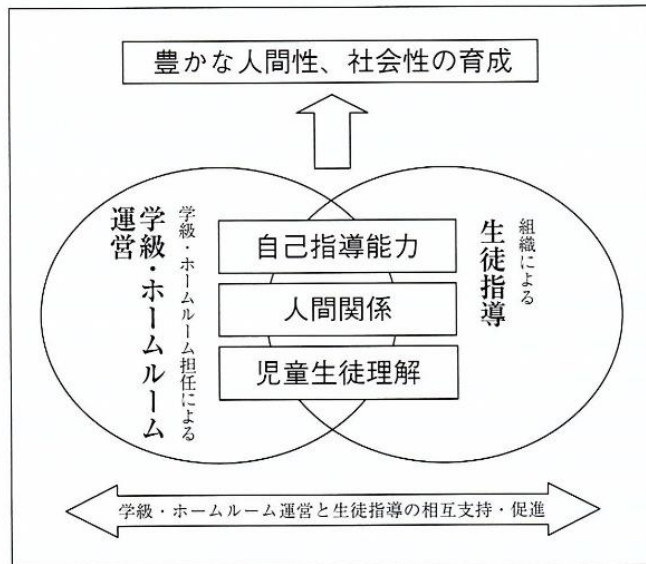
- | | | |
|----------|------------|-----------|
| ①自己理解を促す | ②問題解決を援助する | ③生き方を援助する |
|----------|------------|-----------|

加えて「子どもの学習の達成や在り方生き方の援助として、①個性の伸長、②社会的資質や能力・態度、③自己実現などの成就を意図し、子ども一人一人の自己指導能力の育成を図るものでなければならない。」としている。9)

このことから学力向上の基盤として、問題行動が少なく落ち着いた学級づくりのために学習規律を徹底するなど消極的な生徒指導の考え方ではなく、学級において全ての子どもの自己指導能力の向上を目指すように学習指導、授業を工夫することが学力向上の基盤として生徒指導に求められていると考えることができる。また、この「自己指導能力」の育成を目指す考え方は、押し付けになりがちな学習規律に意味をもたせ、なぜ守らねばならないのかを考えるヒントにもなると考える。

(2) 教師の意識の意識を高める生徒指導

生徒指導用提要においては、次の図に示すように、担任にとって「自己指導能力」、「人間関係」、「児童生徒理解」が重要であることを指摘している。学級担任・ホームルーム担任の指導について次のように述べている。「生徒指導を進めるに当たっては、一人一人の児童生徒の性格、能力、



適性、家庭環境、将来の進路希望などをよく理解し、また児童生徒や保護者と接触する機会が多い、学級担任・ホームルーム担任の教員が果たす役割が大きい」と論じている。またさらに、「特に小学校では、一般的に学級担任が教科も担当しますので、児童生徒のあらゆる面にわたって触れ合い、児童を最も理解できる立場にいます。」と述べている。このことから学年が下がるほど、学級担任の果たす生徒指導の役割は大きいということである。児童生徒の発達段階から考えても小学校、中学校では教師の果たす役割が大きいと言える。10)

このような生徒指導の機能を生かした指導は具体的には学級がうまく経営され、「生徒指導が学級経営・ホームルーム経営の重要な内容を構成していると考えられる」としている。また、前提として清潔で潤いのある空間としての教室環境を整える工夫の重要性についても言及している。実際に、よい雰囲気のある学級には児童生徒の掲示物が貼られ、児童生徒の頑張ったことが一目で分かるものである。

(3) 学級づくりにおける実践的な生徒指導

授業を改善することの大切さは言うまでもないが、学級担任としては、学級づくりさらに重要である。落ち着いた雰囲気での授業ができる基礎は学級の温かい人間関係づくりにある。このような学級づくりについて主に学級担任の視点で考えてみたい。

学級の人間関係づくりには、学級の実態把握が非常に重要である。この学級の実態把握には最近では、Q-Uが一般的に用いられている。これを学年に2～3回調査し、学級の成熟度や気になる子どもを把握する。このような調査を通して学級の実態を把握する。また、グループエンカウンターやソーシャルスキルなど人間関係づくりの取り組みを積極的に取り入れることも効果的である。そこでもう一度学級づくりについて考えてみたい。

どの学級でも、最初から目的集団ではない。多様な考えをもつ児童生徒の寄せ集まりである。この学級を目的集団に変えるのは容易なことではないが、一旦目的集団となると素晴らしい自己指導能力を発揮することを多くの教師が体験しているはずである。言い換えれば、学級の児童生徒一人一人の「自己指導能力」を発揮することも重要だが、実は学級という集団がよい意味で「自己指導能力」を発揮できるようになるとさらに大きな力を生み出すということである。学級づく

りが最も困難だが、教師にとっては学級経営の醍醐味であるとも言える。それほど学級づくりは大切である。

では、このような学級づくりのために教師に求められる資質・能力は何だろうか？私が現場にいたときに、よい授業をする教師に共通の特徴は、「子ども心が分かる」という一点であると思った。子どもの求めていることを予測し、明確に言葉や態度で子どもに働きかけ、その子を支えることができるということである。その子が何を考え、何がしたいのかを理解しているということかもしれない。ただし注意しなければいけないのは「子どもの心が分かる」ということは何も迎合することではないということである。ダメなことはダメと言ってくれるという信頼感も必要である。まとめれば、「子どもの心が分かる」教師とは子どもの行動の価値判断となる考えを明確に示す教師であると言えるかもしれない。

このように優れた教師は、一人一人の子どもの考え方やその傾向を知り、子どもの心を予測して、どのように言葉がけをすれば、子どもが自らの姿に気づき、自発的によりよい行動をしようとするかを考えている。この思考ができる教師は、授業でもこの力を生かし、児童生徒の理解の状況や発言を予想して、意図的な指名も含め、児童生徒が有機的につながるように授業を進めることができる。

さらに言えば、学級全体に対してこれからの課題を予測し、明確に進むべき方向を示すことができる教師であるということである。このような教師の姿勢は、教師の自信となって表れ、子どもの信頼となって学級の力を高める方向にはたらく。

朝の会や帰りの会の教師の話や人間関係づくりの取り組み、道徳の時間の価値についての深い話し合い、特別活動の時間でよりよい学級をつくるための話し合い、よいこと見つけの活動、授業中の発言に対する温かい拍手・・・学級の温かい人間関係づくりの取り組みは無限にある。しかしこれを実施できるのは「子どもの心が分かる」教師なのである。

4. これからの教師に求められる実践的な生徒指導の能力

実際の学級で教師はどのように実践的な生徒指導の在り方でもって指導に当たればよいのだろうか。以下、学級において考えるべき6つの視点から具体的な生徒指導の在り方をまとめてみたい。

(1) 学習規律を高める指導について

小学校の低学年では、ノートの取り方から字の大きさ、授業中の姿勢や意見の言い方、声の大きさまで指導している学校が多いのではないだろうか。このように低学年では、適切な学習規律を指導し、よりよい学習習慣を身に付けることで子どもたちは学習に適應していく。人の話を聞くことや、丁寧な言葉遣い、自分の考えを発言することなど、学年が上がるにつれ、指導することは多岐に渡るであろう。このように子どもたちに適切な学習規律が身に付いていることは授業が成立する基盤であると言える。その結果、学習規律や授業ルールの確立といったことが多くの学校で学力向上の手立ての一つとして取り組まれている。

しかし、教師の中に、学習習慣を指導すれば学級が落ち着き、「授業が成立している。」ように見えるといった具合に安易に学習規律の定着を考えていないだろうか。教師は、担任をもったと

きその学級の学習規律を高める指導を行わねばならない。また、仮に担任でなくとも担当する授業の中で、子どもの学習規律を高めることを意識して授業の臨む必要がある。あえて教師が偏りがちな学習規律といった授業場面での適応を図る生徒指導から論じてみたい。

松尾は、学習規律の指導の基本として次の点が挙げられるとして次のように述べている。

「課題の明確化」、「繰り返し」、「教師と子どもでつくり上げる」、「学習成果と結び付ける」、「規範意識の醸成」がキーワードであるとし、学期・学年ごとに必要な学習規律を新たに加え、学習の質を高めていくようにしている。また、前学年の指導・育成計画をよく確認することが大切であるとし、系統的な指導が大切であるとしている。

さらに押し付け、禁止に終始する指導はだめだとしている。特にこの点が重要であると考えてるので引用してみたい。「学習規律は、集団の秩序をつくり、子どもが落ち着いて学習に取り組む環境をつくるうえで不可欠である。しかし、その指導が一方的な押し付け、禁止に終始するものでは大きな成果はない。たとえその時うまくいっていても後の学年でうまくいかなることが多い。」このことが実践的生徒指導にとって非常に重要である。11)

生徒指導の本来の目的を考えると、その時だけよければという指導は逆に大きなマイナスをもたらすこともある。厳しい教師のあとの担任のときに学級が荒れると言われる。誰も自分の担任のときに学級を荒れさせたくはない。教師にとって、学級が荒れているという状況は、教師個人の資質に関わる重大な問題であり、何とか自分の力で収めたいと考える。また、他の教師に迷惑をかけたくないと思うものである。そこで押し付けの指導は即効性があり、教師としても安易にその指導に走りがちである。しかし、よく考えてみればよい指導とは時間がかかり、丁寧に繰り返すことではじめて身に付くものではないだろうか。

さらに北村は、学習規律に加えて、授業成立の基盤づくりとともに次の点にも配慮したいとしている。12)

- | | |
|--|---------------------|
| ①児童・生徒が発表・発信をする際に、冷やかしたりバカにしたりする学級の雰囲気はないか | (人権尊重の精神、話す態度) |
| ②教師の支持を待たずに勝手にしゃべったり作業をしたりすることはないか | (待つ姿勢、教師の指示とルール) |
| ③学習に直接関係のないこと、たとえばイタズラがきやメールなどをやっていることはないか | (授業への集中度、生徒指導の問題) |
| ④教師(他者)の話や友達の意見を聞く態度・構えが確実に身に付いているか | (聞く態度、コミュニケーションスキル) |

学習規律を高めるためには、このように教師が配慮すべきことが数多くある。学習規律を子どもに伝えたからできるようになるものでもないのである。また、この指導を担当が一人で行うのではなく、教師集団、学校全体で協力して実施しなければ本当の意味で効果は上がらないと言える。

(2) 授業の質を高める教師の姿勢

教師は授業で勝負すると言われる。生徒指導が本当に意味で機能するためには、授業の質を高める教師の姿勢が重要である。そのためには教師が、子どもにとってどうかという視点を明確にもつことが大切である。

片山は生徒指導と授業について教師の笑顔を含め、椅子や机、ゴミなど学習環境が整っていることの大切さを述べたうえで、授業について次のように述べている。「あなたは、授業の内容もわからず、教師の配慮もない教室で、ただ黙って座っているだけの45分、あるいは50分が子どもにとってどれほど長いのか、また苦痛であるか、考えてみたことがあるでしょうか。学校生活のなかで最も多くの時間を占めるのは、まぎれもなく授業です。」このように子どもの視点に立って、授業を考えてみるのが、授業の質を高める教師の姿勢であると言える。

またさらに、かつては教師の「ここがテストにでるよ」という言葉がけ一つで教室の集中力がグッと増すことが当たり前だったが、今は教師の言葉に反応しないケースが増えてきていると指摘し、安易に評価に絡めていく単純な方法では、子どもはついてこなくなっていると指摘している。授業エスケープは数学や英語といった積み重ねを要する科目ではなく、生徒にあまり配慮しないまま授業を展開する教師の時間に目立つという例を紹介している。

不登校やいじめ、授業エスケープ等の問題行動は、全てとは言えないが、教師が子どものことを思い分かりやすい授業をとおして信頼関係を深め、適切な授業をすることで改善できる可能性がある。さらに片山は次のようにも述べている。「教師の行き届かない指導によってアンダーアチーバーを出すことがないように心がけ、配慮の行き届いた魅力ある授業を行うことは、生徒指導の観点からも重要です。学級崩壊・授業崩壊や授業エスケープを安易に子どもの責任にするのではなく、自分の授業は魅力的なものになっているか、日々振り返ることが大事です。」¹³⁾

生徒指導の困難な状況にあればあるほど、子どもの立場に立って、勉強が分かりたい、学級の中で居場所がほしい、何か楽しいことがしたいと子どもたちは願っていると感じる教師の感性を失わないことが大切である。問題行動が続くとその対応に追われ教師も疲弊し、強い指導によって解決しようと考えがちである。そのときにもう一度このような原点に立ち返り指導を見直し、授業の質を高めることが大切ではないだろうか。

(3) 毅然とした態度で臨むこと

毅然と恐ろしいは違う。学習規律においてもその他の活動においても教師が恐ろしいから指示に従うという状況は、その場はよくても長くは続かないものである。前にも述べたがダメなことはダメとはっきり言うことが大切である。このとき毅然とした態度が必要になる。これは社会のルールであり、将来社会人として生きていくためにきちんと教えていく必要があると自信をもって子どもに伝えていくことである。毅然とした態度の背景には、教師の社会人としての厳しさと社会のルールを意識したバランスの良い考え方が必要になる。

このように社会で生きていくために大切なことは毅然と教えることが大切である。これを教師の都合のよいよう伝えれば、当然子どもは都合のよいようにすることが社会のルールと学んでしまう。これは生徒指導ではない。また、子どもが教師のいうことを聞かないからと言って、圧力をかけて従わせるのは指導とは言えない。教師の都合でしかない。

実践的な生徒指導として考えるなら、日頃から人間関係づくりの準備を怠らず、丁寧に子どもが理解できるように説明することである。問題が起きたときに怒るのではなく、冷静に社会という窓口から見て、子どもに自らの問題に気付かせどのようにすることが望ましいかを考えさせる教師の姿勢が必要である。毅然とした態度とは、それを将来の子どもの姿と重ね合わせて譲れないと言える教師の姿勢かもしれない。

(4) 指導が困難な子どもへの対応

学級には立ち歩きなど発達障害を疑われる子どもが増えている。このような指導が困難な子どもへの実践的な生徒指導はどのようなすればよいのであろうか。生徒指導提要においても多くの紙面を割いて、それぞれの症状についても説明を加えている。また、具体的な対応の仕方として、例えば掲示物一つについてもどの子どもにも理解できるようにイラストやカードにするなどの方法も紹介されている。教師の言葉による注意だけでは、指導としては不十分であり、ユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の視点をもって子どもたちに接することが必要になる。

この問題に取り組むには、どのようなユニバーサルデザインの視点が重要になるのであろうか。佐藤は次のようなユニバーサルデザインの定義・イメージを提案している。14)

- 発達障害を含む配慮を要する子どもには「ないと困る支援」であり
- どの子どもにも「あると便利で・役立つ支援」を増やす
- その結果として、全ての子どもたちの過ごしやすさと学びやすさが向上する

「全ての子どもたちに」という視点で考えることが教師には必要である。とかく問題のある子の対応に偏りがちだが、子どもの立場に立てばみな同じ仲間なのである。それぞれの違いに対応しながら、同じように配慮することを大切にすべきである。

この点は自己指導能力をはぐくむという視点からも考えることができる。「なぜ、学習規律を守らねばならないのか?」、「守ることで得られるものは何か?」、社会性を育むためにもきまりをただ遵守するのではなく、その意味を理解し自らがどのように行動することが望ましいか考えることのできる子どもに育てることが大切である。きちんと理由を説明し、選ばせることは発達障害をもつ子どもの基本的な対応であるが、これは全ての子どもにも当てはまるものである。

低学年の子どもたちに丁寧に学習習慣を指導することは教師の務めであろう。幼い子どもが無条件に受け入れる学習習慣や学習規律を、学年が上がり子どもが成長するにつれ、理由を考え自らの力で判断できるようにすることはもっと重要である。このように子どもの自己指導能力をはぐくむという視点を大切に指導が困難な子どもへ対応することを忘れてはならない。また、これは日々の子どもの観察から生まれるものであり、教師と子どもの子どもの温かい人間関係の醸成なくしては成立しないことも付け加えておきたい。

(5) カリキュラム・マネジメントの視点

これからの学校に求められることとしてカリキュラム・マネジメントの視点が重要である。特に生徒指導の意味では何かが起こってから対応するのではなく、子どもたちが出会うであろう困

難を予想し、その困難に打ち勝つ力を身に付けさせることである。そのためにもカリキュラムの関連を意識し、学習につながりをもたせるとともに、一歩進んで、意図的・計画的に困難と向き合うカリキュラムを作り上げるべきではないかと考える。

私の尊敬するある校長先生の名言に「大きな困難は自分をダメにすることがあるが、小さな困難は自分を強くする。」という言葉がある。よい教師は、意図的・計画的に子どもたちが自力で乗り越えることができる困難をカリキュラムの中に用意していると私は考えている。言い換えれば、一年間という与えられた時間の中で、どのように子どもたちを鍛えるかの視点である。

例えば、人間関係に深まりがない学級が運動会で大縄跳びをする場面である。練習を続ける中でできると問題が起きると予想し、子どもたちにどれくらいの困難な状況をつくり、子どもを鍛えるかは教師の腕の見せ所かもしれない。教師が前に出て片付ければ子どもに困難はないが、子どもたちが協力して乗り越える問題として提起し、学級で解決する問題として話し合わせ、子どもたちが自主的に練習をして乗り越えるといった取り組みである。このような取り組みをするためには教師としての経験が必要ではあるが、多様な教科のつながりや特別活動や総合的な学習の時間などカリキュラム全体を見通し適切に手を打つことができれば、さらに効果的な取り組みができるはずである。

加えて私は、実践的な生徒指導として、学級全体取り組みの中からさらに子どもたち一人一人へとベクトルを向けるべきであると考え。子どもは一人一人違う。一人一人が自分の課題に気付き、次第に全体の課題に気付く力を付けさせたい。今の少し先にある自らの望ましい姿に気付くようにし、自力解決のできるほんの少しの困難を用意できる教師でありたいと思う。

(6) PDCA サイクルを意識した生徒指導を心がける

実践的な生徒指導として、児童生徒の実態を的確に把握し、目標を立てることが重要である。先にも述べたが、一年間という限られた時間の中で何ができるかを考え、具体的な取組とそこで育つ児童生徒の能力を予想し、的確に手立てを講じていく。その育ちの様子を常に児童生徒の言動や表情、表現したもの（作品や感想文など）また他の児童生徒との関わりから評価し、さらに適切な手立てを講じていく。これはまさにPDCAサイクルによって学級経営が行われていることになる。

例えば、学級活動の多くの時間の中に学級の諸問題の解決がある。「ただ、問題がありませんか？」では学級活動の意味がない。教師は、学級の問題を的確に見抜き、例えばアンケートをデータ化し、児童生徒に問題に気付かせる工夫が必要である。次に具体的にはどのように取り組むかを話し合う場面では、子ども一人一人の考え方の傾向や性格を読んで、話し合いを進めながら、あたかも自らの力で問題解決ができたように仕組む。さらにその後の活動に見通しをもたせ、机上の空論に終わらぬように、見届けながら適切に指導し、子どもたちが自らの力で評価し、次の問題の解決に取り組むといったPDCAサイクルを教師が意識し、子どもたちが実際に動かせることが自己指導能力をはぐくむためには重要である。

5 まとめとして

実際の生徒指導の場面は千変万化であり、いつも同じ対応で解決することはまずない。教師と子どもの数だけ生徒指導の姿があると考えらるべきである。ただ本論をまとめながら、そこには何らかの原理原則があるように思えてならない。やはり私が大切にしたいことは繰り返し述べてきたつもりだが、子どもの姿を見て、その子どものことを思い、適切に指導することである。特に実践的な生徒指導の在り方を考えるときその基本にあるのは、子どもの立場に立って考えることができるということではないだろうか。そこで生徒指導の三機能を生かして、子どもたちが納得する指導を積み重ねることにあるように感じる。

生徒指導は経験無くしては語れない。教師が積極的に子どもに関わり、自ら努力して苦勞して携わった経験が生きて働く教師の力になるのである。理屈では分かっているが実践できないのが生徒指導である。敢えて実践的という視点で本論をまとめたのはこのためである。

子ども一人一人を大切にすることはユニバーサルデザインやインクルーシブ教育の視点にもつながる。発達障害などの子どもの困り感を理解して、学級みんながまとまって困難を解決するところに学級づくりの面白みがある。そこに時間軸を意識して、一年間を見通した指導が生まれてくる。PDCA サイクルを意識した生徒指導はここに生かされるはずである。

次期学習指導要領案が提示され、カリキュラム・マネジメントやアクティブ・ラーニングなど次々に取り組むべき課題が生まれている。その中でもチーム学校という考え方がその総則で大きく取り上げられている。従来は担任のみが苦勞していたが、これからは多くの専門の知識をもった人が児童生徒の生徒指導上の問題に関わる時代がそこまで来ている。このように教師一人が抱え込まないことはとても大切である。ただ私は、どのように仕組みを整えようとも、一番近くで子どもたちの前に立ち努力しているのは一人一人の教師であり、教師一人一人が自分の指導に自信と誇りをもつことなしに子どもたちを生かす実践的な生徒指導はできないと考える。

教師は日々非常に大きな負担の中で実践に取り組んでいる。全ての問題について具体的な形をまとめることはできないが、実践的な視点で、その方向性や対応の基本にあるものをまとめたつもりである。本論が実践に取り組む教師にとって少しでも役立つことを期待したい。

【引用・参考文献】

- 1) 文部科学省 生徒指導提要 p1
- 2) 文部科学省 生徒指導提要 p5
- 3) 文部科学省 生徒指導提要 p6
- 4) 平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査 p30
- 5) 平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査 p63
- 6) 平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査 p66
- 7) 平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査 p66
- 8) 平成28年度全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査 p65

- 9) 有村久春 編著 学力向上の基礎となる生徒指導 教育開発研究所 2009 pp20-23 10) 文部科学省 生徒指導提要 p138
- 11) 杉田洋 編著 小学校教師のための生徒指導提要実践ガイド 2011 明治図書 pp30-31
- 12) 有村久春 編著 学力向上の基礎となる生徒指導 教育開発研究所 2009 pp36-37
- 13) 片山紀子著 [新訂版] 入門 生徒指導 2016 pp95-98
- 14) 佐藤慎二 実践 通常学級ユニバーサルデザイン I 学級づくりのポイントと問題行動への対応 2014 東洋館出版社 p21